

## 第2回府中市文化芸術推進計画検討協議会会議録

1 日 時 令和7年2月17日（月）午後2時～4時

2 場 所 府中市役所おもや4階 第2特別会議室

3 出席者（敬称略）

(1) 委員9名

大平洋介委員、小野一之委員、小林真理委員、小林瑞恵委員、新井有佐委員、中村洋子委員、橋本善八委員、鹿島伸明委員、澤井すみ子委員

※ 玉村明日香委員 欠席

(2) 職員5名

佐藤文化スポーツ部長、平澤文化生涯学習課長、斎藤文化生涯学習課長補佐、中司主任、佐藤主任

4 報告事項

(1) 配布資料の確認

ア 会議次第

イ 資料1 第1回文化芸術推進計画検討協議会会議録（案）

ウ 資料2 市民・団体アンケート調査結果概要

エ 資料3 府中市の文化・芸術に関する市民調査結果報告書

オ 資料4 府中市の文化・芸術に関する団体調査結果報告書

カ 資料5 現行計画の主要な事業の実施状況

(2) 前回会議録の確認

各委員に校正を依頼した前回会議録（案）について、市民に公開することが了承された。

(3) 市民・団体アンケート調査結果について

事務局から、市民・団体アンケート調査結果について報告があり、了承された。

(4) 現行計画の主要な事業の実施状況について

事務局から、現行計画の主要な事業の実施状況について報告があり、了承された。

5 審議事項

フリーディスカッション

（テーマ：アンケート結果から見えてくる課題及び計画に盛り込むべき視点について）

会長： はじめに、事務局から、考えなどがあれば発言をお願いしたい。

事務局： 事務局として次期計画に盛り込みたい視点は3点ある。

1点目は、平成30年に施行された「障害者による文化芸術活動の推進に関する法律」等に基づく視点である。障害者が文化芸術活動に参加しやすい環境の整備や、交流の促進などを目指していきたい。2点目は、文化・芸術活動を行う方への応援体制に関する視点である。3点目は、様々な地域課題を解決するための方法として、文化や芸術を活用するという視点である。

事務局としての現時点での考えは以上だが、これにとらわれず、委員の皆

様それぞれのご見識からご議論いただきたい。

会長： それでは、委員から発言をお願いしたい。

委員： 文化財や伝統文化に対して7割が親しみを感じており、これは府中の特色ではないか。まちの中心に大國魂神社やけやき並木があり、お祭りが盛大に行われていることが影響しているのではないかと思う。その中でも、けやき並木への意識が減少しており、意外な結果となった。けやき並木通りの景観を心配する意見があったが、まちの中心にありながら、まちの中に埋もれてしまっているのではないか。けやき並木の広場としての文化的な活用を考える必要がある。

次に、新型コロナの影響は次回の計画の中に入れるべきである。参考になる事例として、コロナ禍に、全国の主要な美術館、博物館が臨時休館する中で、世田谷美術館は開館していた。災害が到来したときの文化活動のあり方について指針となるものをポストコロナ時代の計画には謳う必要があるのではないか。

委員： アンケート結果で、芸術鑑賞や文化活動を行わなかった理由として、「仕事や家事が忙しい」「子どもの世話をしてくれる人がいない」との回答がある。府中市では様々な催し物が開催されており、文化施設も多い文化のまちであるのに、子どもの世話をしている人がいないために参加できないのはもったいない。文化を楽しむ機会や場所があるにもかかわらず、環境や属性に左右されて参加できないというのは解消できる課題ではないか。例えばフランスでは託児所があるケースもある。また、障害者の家族の「迷惑を掛けてしまう」という懸念を払拭するには、「どなたでも参加して良い」という文言ではなく「皆で騒いでも大丈夫です」という一言が必要である。

文化施設があり、企画面も潤沢にあるならば、より多様な人が来られるよう、施設やイベントにアクセスしやすくなるような工夫が必要であり、持っているものを最大限生かすことが重要である。

資料2の5ページに多文化共生とあるが、在日の外国人や多国籍の人たちについて言及されておらず、アンケートの対象にもなっていないため、多様性という単語の方が馴染むのではないかと思う。

委員： 催しやイベントの情報をどのようにキャッチしてもらうかが課題である。情報をキャッチできなければ、新しい人との交流につながらないからである。今後10年は、情報の取得方法が年齢や生活スタイルによって大きく変わっていくと思われる。時代に合わせた方法を取ること、新しい方法を市民に伝えていくことの2つが重要ではないか。若い人から年配の人までを取り込めるような情報発信について計画の中に盛り込んだ方が良い。

また、幸福度の計測が興味深い。文化芸術は、様々な考えがあることを許容するし、同じであることに対する違和感を芸術は表現できる。そういった文化芸術に関わった人の幸福度が高いという結果は、新しい視点になるのではないか。老若男女、学校や会社など様々な場所で課題があるが、異なるコミュニティを持っていたり、普段の自分とは違うライフスタイルを表現できる場があったりすることは、社会生活の中で重要な役割を果たしているのではないか。そういったものに参画し、また、参画することを府中市が応援、

促進できると、家事が忙しくて文化芸術活動に参画できないといった課題の解決ができたり、多様性や、共生社会の実現につながるのではないかと。

委員： 子どもの参加が少ない、小さな子供がいる親が参加できないということだが、興味を持ってもらえるよう各団体とも工夫して活動している。幼い頃に体験して楽しかった記憶があると、時間が経ってからまたやってみたいと思うことがあるので、実際に活動することはもちろんだが、鑑賞だけでも良いので少しでも体験しておくことが重要である。

広報活動について、「広報ふちゅう」は特に高齢者にとって重要な情報源である。インターネットを利用できない人も、紙面だと情報が探しやすくなるため重要だ。

地域の芸術家に対する支援は、芸術劇場で「府中の森めばえコンサート」を実施しているが、出演当時はそこまで有名ではなかった方が、その後に様々な場でお名前を見かける存在になるなど、地域の芸術家に対する支援になっており、続けて欲しい。

多文化共生や多様性について、催し物をするとう国籍の方が来てくれる。外国籍の方が所属している団体もあるので、小さなことから始められると良い。

委員： コロナ禍の時は社会情勢が不安定で、区民生活が優先され美術館は二の次だった。世田谷美術館の設置者は区であり、区が閉館を命じなかったため開館していたが、開館に対して非難する声もあった。再開した際に、「作品のない展示室」という企画展をしたところ、通常時より来館者が増えたということもあった。当時の状況を整理し、府中市は府中市なりの災害時等における方針を計画に盛り込むことが重要ではないか。

また、前回計画で得たものと、足りなかったもの、その比較対照がこの議論に必要な。アンケートに引きずられているところがある。アンケートの回収率、回答率は気にする必要はないのではないかと。そもそも文化が自分と関係ないと思っている人は一定数存在する。文化の解釈を広く捉えることが重要である。野球はスポーツだが、野球としての歴史もあり、文化ともいえる。人間の営みに携わる様々なものが文化であるという、より広義の考え方で計画を考えていくと、他の委員から話があったように、障害の有無といった境界を薄めていけるのではないかと。世田谷区でも同様に、障害者の芸術活動の支援が柱としてあるが、そもそもボーダーを取り払うことを目的にするべきではないかと考えている。その人がその人らしく生きていけるように、支援する側、支援される側を充実させることが重要である。

種まきについて、何かを始めるのに年齢は関係ないということも一理あるが、小さいころから体験の場を作ることは大人の仕事である。

委員： 文部科学省は、地方自治体は文化芸術が持つ創造性を地域振興や観光、産業振興に横断的に活用し、地域課題を解決するべきであると言っている。文化芸術が持つ創造性を地域の社会貢献や福祉等に活かし、点から線、線から面へと、全体が豊かになる環境づくりが今後10年の課題だと考えている。

また、文化センターと小学校が避難所となっているが、文化という側面から考えた際に、場所として適切か考える必要がある。府中市は多摩川と接し

ているため、いつ災害が起こるか分からない。10年スパンで考えるのであれば、少子高齢化や環境、自然災害について考えるべきではないか。

委員：文化芸術に参画するきっかけがないという人が多い印象である。興味があれば動くが、興味がなければやらない。興味をもってもらうにはどうすればいいかを軸に考えてはどうか。

多文化共生について、アーツカウンシル東京のホームページで市長が多文化共生の話をした事業を紹介していた。メッセージとしては立派にできており、暮らしと表現の芸術祭として事業を実施していることが分かったが、アンケートの結果から、参画できない理由やどうやって興味を持ってもらうかを考えなければならない。

先日、ふるさと府中歴史館に伺ったところ、入り口にすごろくゲームがあり、日本人や外国人の親子が楽しんでいた。アンケートの回答にもあるように、謎解きゲームのような参加しやすいものや、3世代で参加できるものを企画してはどうか。

「広報ふちゅう」は、改札にも置いてあるが、働いている人を対象にしており、高齢者は入手しづらい。他自治体では、スーパーマーケット等に自治体の広報物のボックスが設置されている。より一層、コミュニティに近い場所で入手できる工夫をしてはどうか。

副会長：この1年で文化芸術を鑑賞した人が前回調査から25ポイント減少しており、衝撃を受けている。アンケートの内容としては、少子化が進む中で、子どもたちに関することは重要だと考えている。

府中の森芸術劇場は現在改修工事をしているが、広報宣伝はこれまで紙媒体中心だったが、今後は配信が中心になるだろう。一方で、受け取り手が追いついていない側面もあり、大きな課題になる。シフトのタイミングが1つのテーマになるのではないか。

基本施策3は評価が高く、歴史と伝統が最も大切にされていると感じた。

事務局から次期計画に盛り込みたい視点として提案のあった障害者等の多様性の視点や若い芸術家への支援、にぎわいのあるコミュニティについては、府中市が更に取り組むべきものと考えている。ぜひとも盛り込んでほしい。

会長：「広報ふちゅう」は全戸配布か。

事務局：全戸配布ではない。

会長：LINE等での情報発信をしているか。

事務局：市の公式LINE等で発信をしている。

会長：財団法人等が実施しているイベントの情報についても発信をしているか。

事務局：全てを掲載しているわけではなく、SNS等での広報が必要な際に、各種あるSNSから選択して発信をしている。

会長：LINEでは、市の重要なイベントや、ゴミの回収等といった情報と共に、青少年関係の情報や、環境問題など欲しい情報を選べるのか。

事務局：その通りである。

委員：文化は辞書的な定義では人々の営み全てとされているが、そのうち文化と言えるものは、継続性や発展性、共有性が前提となるため、文化イコール伝統文化と捉えて良いのではないか。

府中市は、伝統文化を見えやすく、分かりやすくさせているという特色がある。伝統文化を軸にして今風の多文化共生や多様性の文脈に落とし込む、還元することが1つのスタンスになるのではないか。スポーツ、新しい音楽、芸能、現代美術も府中市の伝統文化として発信できるのではないか。

今風のキーワードであると、文化のコミュニティスペースを作っていくこと、サードプレイスとしての文化施設という言い方もできる。レジリエンスという言葉があるが、新型コロナや震災などの災害時に文化というものをどう考えるべきかが今後必要ではないか。

委員：文化には、子どもから大人まで、年代や障害の有無などの属性にかかわらず多くの人を巻き込む力がある。多様性の推進においては、文化が最も武器になると考えている。文化を活用することで、様々な人がアクセスできるプラットフォームができ、そこで普段会えない人達と出会うことができる。

自身の事業として小学生と障害のある人達とのワークショップを行った。府中市には、そういったことを広く展開して欲しい。

自分の関わっている領域外との交流を通して、多様性を大事にする社会の文化を作ること、幸福度の向上につながるのではないか。障害の有無ではなく、誰しも様々な特性・属性を持っていることを前提に事業を展開していくべきである。例えば、母親であっても、誰かの娘であり、誰かの友人であるなど色々な属性を持っている。様々な要素を持ち合わせている個人が自分の人生の中で文化の触れる機会が増えると良い。

委員：興味を持たせること、種まきとして体験の場を増やしていくことは重要なことだ。今後10年間を見据え、どのあたりを府中市がバックアップし、打出していきたいのかを考えて、興味や体験につながる仕掛け方を検討することが重要である。

具体例を挙げると、協働共創推進課が実施した市民提案型協働事業として小学校でヤギを飼うアイデアが採用された。日曜日はヤギに餌を与えられないため、地域の人たちがそれを支え、高齢者との交流、見守りの場として機能している。このように、市民の人たちは多くの新しいアイデアを持っている。

市役所は、市長を中心に大きなビジョンを持ち、各課で実践していく縦割りのイメージがあるが、文化は市役所が抱えている様々な問題等を横断的につないでいくことができる共通項であり、市の課題を解決する新しい糸口を生み出していけるのではないか。市民が、自分が持っている問題を表現することで、密着した形で解決されていく。市役所が提案するのではなく、自分たちの問題を自分たちで解決することで積極的に関わっていくきっかけになる。どのように市がバックアップし、府中市をより良くしていけるのかというところにつながっていくとおもしろいのではないか。

委員：きっかけがないことが活動に参加しない理由として多い。見たことがない、聞いたことがないところに行くことはない。どこかで聞いたことがあれば、行くきっかけになる。普段自分が接しないものにも興味を持ってもらえるよう、広報活動だけでなく、それぞれが好奇心を持って挑戦する姿勢を持つことが理想だ。

広報誌は全戸配布ではないが、新聞の折込みに入っている。新聞を取っていない世代もいると思うが、市議会だよりはポストに投函されている。

会長： 市議会だよりは全戸配布か。

事務局： 市議会だよりは全戸配布である。

委員： 広報誌も、市に届出をすれば配布してもらえる。また、駅のラックなどでも配布している。他にも希望した分野の情報が市から送られるメールサービスもある。ただ、自分で登録しないと届かない。情報を得ようと思ってもらうことが重要ではないか。

委員： 種まきの具体的な話だが、世田谷美術館では、公立の小学校4年生、公立の中学校1年生を対象に鑑賞教室を実施している。参加者の中には博物館実習の学生として戻ってきた人もいる。体験を提供することは大人の仕事であるが、未就学児、学生、社会人、子育て層、子育てが終わって一段落している人、定年になった人等、年代に応じた種まきの方法がある。どの年齢であっても何かを始めるのに遅くないとすれば、チャンスを提供したい。社会構造はどんどん変わるが、方法論のヒントになることを計画に盛り込めると良い。

世田谷区の鑑賞教室は、1年間で約1万人の小中学生が来館する。鑑賞教室でどのような体験を与えるかは常に議論しており、現在は、少人数のグループごとに人生経験豊かなボランティアを一人付けて、案内を任せている。2時間程度の鑑賞の中で、子どもたちにとって案内ボランティアが大切な人になり、帰りには握手をする様子も見られる。何を見たかは覚えていなくても、個性豊かな大人に出会った経験をした子供たちが将来の美術館の顧客になる。飲み屋でも常連客が売上の8割を支えているという。コアなファンを醸成するためには、ロコミが大事だ。

企画展のアンケートによると、ポスターや新聞折込みではなくロコミやSNSで情報を得る人が多くなっている。今はロコミとSNSは同等と考えていい。SNSで情報を得るだけでなく、他の人を誘って参加するように仕向けることが仕掛けになるかもしれない。X、Instagram、Facebook等様々なSNSを計画的に投稿することは、紙による宣伝よりもコストパフォーマンスが良い。

また、伝統芸能だけでなく、多様な府中の文化をアーカイブすることが、次の世代の府中市民にとって重要だ。オーラルヒストリーも含めて採取していくことが重要である。

委員： 他の委員の意見を聞いて世代交代の難しさを感じた。その他に老朽化の課題がある。文化芸術事業を行っている施設は限られているのではないか。府中の森芸術劇場、美術館、都立府中の森公園の周辺は文化芸術と触れ合う場所として貴重な場である。

次の10年、どのようにして次世代を取り込んで引き継ぐかが重要である。府中市立府中第一中学校の改築の際に、正門を元のまま残した。場所が消えると懐かしさや故郷に帰ってきたという思いが消える。文化の伝統を守り、新たな環境に受け継いでいく時には、これまでの形を残して継承するようにしたい。

また、文化芸術の中での社会貢献についてルールづくりが必要ではないか。変わっていくこと、変わらないこと、残す、遺すことについて、市制施行70周年を機に見極めることが必要である。

委員： 先程の興味を持つきっかけづくりの話の続きになるが、府中市が舞台となる芸術文化の作品として「ちはやふる」があり、競技かるたブームを引き起こした。市民が興味を持つきっかけの「仕掛けづくり」を市が遂行し、若い世代を取り込むことが必要である。このようなチャンスを逃さず発信しないともったいない。市には「武蔵府中郷土かるた」がある。

府中市のキャラクターについても発信するべきである。今は、子どもだけでなく、キャラクター好きの大人もいる。上手く露出し、丁寧に育てることで、グッズなども爆発的にヒットするのではないか。チープな物ではなく文化芸術として品質が高い物を市内の老舗菓子店で商品化するなどの計画的な工夫で、国内だけにとどまらず外国人へのアプローチにもなるのではないか。

また、府中の施設ではフォトスポットが上手く使われていない。景観を乱さない程度に、映えるよう工夫することで拡散につながるのではないか。例えば、現在東京国立博物館では特別展と人気のキャラクター展が同時開催されている。来館者が併設されている庭園にも循環するよう工夫されており、普段博物館に興味のない若い世代を呼び込むための「仕掛けづくり」に上手く成功していた。

副会長： アンケート結果によると、居住地域によって参加度にばらつきがある。文化を発信する施設同士がこれまで以上に連携し、総括的に情報発信をすることで府中市の文化度が上がるのではないか。

伝統芸能の継承については、日本の伝統芸能は各々に流派があるため触れづらいところがある。府中市には府中囃子があり、小さい子ども達も参加し、地域ぐるみで育てていく文化があることは、府中市における伝統芸能の継承としては成功事例になるのではないか。

今回の計画については、令和8年度からの8年間を計画期間としているため、社会や情報の流れに柔軟に対応できる計画にすることも重要である。

会長： 人は多様な側面を持っているという話が出たが、それはその通りである。母親として子どもとイベントに参加したいと思うことがある一方、一人の女性として文化に親しみたいと思うこともあるだろう。文化に触れることで自分を取り戻し、子供とまた向き合えることもある。そのため、対象者を一面的に見ない方が良いが、ターゲットを決めなければ対象者に届かない。市として事業を実施する際には、どのような方法論で峻別して取り組むかが課題になる。

仕掛けづくりの話があったが、府中市には美術館や劇場などの資源が豊富にあり既に様々な事業を行っているが、市民の自発的な活動を引き出す仕掛けとして、今までやってきたことと別の方法を試すことができれば広がりが生まれるのではないか。

また、アーカイブについてだが、美術館や博物館はアーカイブをしっかりとしている施設が多いが、劇場やイベント系は比較的アーカイブされていない。祭りや伝統芸能だけでなく、消えてなくなってしまう文化、記憶にしか

残らない文化があり、行政や公益財団法人はそのアーカイブに取り組むべきである。

最後に伝統文化についての意見が出たが、確かに伝統文化には流派があり、付き合いが難しい部分もあるが、行政や公益財団法人だからこそ流派を超えることができるのではないか。例えば、能が盛んなとある県では宝生流が強いが、全国で見るとそうではない。そこで、公益財団法人が地域の流派と併せて全国の流派を積極的に取り上げることで地域の能楽自体を後押ししている。市民だからこそできることもあるが、流派争いや縦割りにならないように俯瞰で見ることにも公益財団法人や行政の役割になってくる。それぞれの役割や方法論を見直し、次につなげていけるような計画づくりができると、これまでやってきたことが生かせるのではないか。

## 6 その他

次回の府中市文化芸術推進計画検討協議会について、令和7年3月21日（金）午前9時半から開始することです承を得た。